

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

ハリラヤ・カードのミッキーマウス

イスラムと現代消費社会

多和田裕司(大阪市立大学大学院文学研究科教授)

昨年8月のラマダン(断食月)の際にクアラルンプールのとある古いショッピングモールを歩いていたとき、新聞や雑誌などが並んだ小さな売店で、とても風変わりなものに目がとまった。おそらく著作権処理が複雑であろうからここで写真を掲載することは控えるが、それはバジュ・ムラユ(マレー人男性の伝統衣装)を身にまとったミッキーマウスの絵柄のハリラヤ・カードであった。ミッキーのカードの他にも、ミニや白雪姫と7人の小人などの、ディズニーのおなじみのキャラクターたちが「Selamat Hari Raya」や「Salam Aidilfitri」の文字とともに印刷されたカードが何種類か売られていた。

最近では少なくなってきたが、マレー人はハリラヤ・プアサ(断食月明けの祝日)が近づく頃に互いにカードをやりとりする。少し以前であれば、ハリラヤ・カードのデザインといえばモスクやイスラムをイメージさせるような模様もっぱらであった。ここで見たミッキーやミニのカードは筆者が知るハリラヤ・カードと違っていただけではなく、アメリカの象徴であり、偶像であり、アニメの人気キャラクターでありという点で、ある意味では「非(反)イスラム的」とされるかもしれないようなデザインだったのである。

もちろんこのデザインになんらかの政治的、宗教的メッセージが込められているとは思えない。単に人気のキャラクターということで用いらただけであろう。しかし逆にそうであればこそ、このカードに消費社会や商品化や「オタク文化」などが広がった現代マレーシアにおけるイスラムのあり方を読み取ることができるのではなかろうか。

1980年代以降経済力の向上によってもたらされた消費社会の広がりとともに、マレーシアではイスラム

が狭い意味での宗教の領域を越え出るような形で実践される例を数多く見ることができる。たとえばアラビア文字表記で美しく描かれた「アッラー」の文字を額装して部屋に飾ったり、女性誌のグラビアモデルをまねて頭髪を隠すスカーフをまったり、アッラーを讃える歌を歌うポップグループのCDを聴いたり、あるいはラマダンのブカ・プアサ(その日の断食終了後はじめて飲食物をとること)を一流ホテルのレストランで愉しんだり等々の、ムスリムのライフスタイルのひとつとしてイスラムが消費される状況が生まれているのである。

このような状況は、イスラムという観点からとらえればイスラムの日常生活への浸透をあらわすものとして見ることもできよう。他方で、現代消費社会という点に着目すればグローバルに進むあらゆる領域の商品化がイスラムにも波及していると考えられることもできる。イスラムはミッキーまでも改宗させるのであろうか。それともイスラムがミッキーとともにキャラクター商品として売られていくのであろうか。

マレーシアで観察されるイスラム実践はまさにイスラムと現代社会との接点に生じているものであり、その意味で現代のイスラムを考える上できわめて興味深い手がかりを提供している。それがどのようなものか、いま少し考えていきたい。

< 筆者紹介 >

1961年、大阪府生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科修了。博士(人間科学)。長崎大学助教授などを経て現職。専門は文化人類学。日本マレーシア学会運営委員。クランタン州をはじめとしてマレーシア各地でのフィールドワークに従事。マレーシアを手がかりに現代世界におけるイスラムのあり方をとらえるべく研究を続けている。著書に『マレー・イスラムの人類学』(ナカニシヤ出版)など。